四季録

邪宗門と谷川書店

東京で暮らし始めた１９７０年。前年には東大の安田講堂占拠事件があり、いまだ大学紛争のウネリが燻ぶっていたころ。御茶ノ水駅前には武装した機動隊が整然と並び、長髪でやせっぽちの学生集団を威嚇する。若者たちの大いなる狼煙も、歴然たる肉体の差にむなしく映って見える。

近くの食堂でやきそばを食べていると、白黒テレビが三島由紀夫の割腹自殺を伝え、箸が止まる。生身の人間が世に抗い動かそうとする、闘争の火を燃やしたころがあったのだ。

２年前の三億円強奪事件も生々しさを残す。現場である府中刑務所のコンクリート塀は、巨大な彫刻にも見えた。国立市に住んでいた僕は、冷え込んだある日、自転車で府中の友人を訪ね、空の一升瓶に灯油を分けてもらった真夜中の帰り道。その塀の前で警官に止められ、放火犯の疑いでこっぴどくやられた。

ただ僕はそんな時代の蚊帳の外。いわゆるノンポリ。新聞も読まず、ラジオも聞かずテレビもなし。自分の目に映るものがすべて。絵を描いては潰しの日々を送りながら、６年以上も毎日通った店が二つある。

その一つ谷川書店。小さな古本屋だが内容濃く、本の回転が毎日ある。谷川さんは頑固オヤジで、気に入らない客はハタキを手にパタパタやって追い返す。なぜか僕には淡々と優しく、貧乏暮らしを助けてもらった。２人でタバコを吸いながら毎日話をする、唯一の東京人だった。

買った本を片手に、レンガ造りの古びた喫茶店「邪宗門」に。ここも小さな店だが、いつもいっぱいで相席。知らないどうし面と向かい、布ドリップのコーヒーを飲む。本を読むのも上の空、多彩な顔ぶれの客たちをひそかに観察した。そして誰にも話しかけず、かけられず終わった。

都会ならではのこと、地方ではまずありえない。少し寂しくもあったが、だからこそ僕のようなものが通い続けることができたのだ。当時珍しくも肩まである髪を金色に染めたご主人と、控えめな奥さんは、緊張の僕を物腰柔らかく受け入れてくれた。

一日をほぼ部屋で過ごす絵かきという人生。外との関わり薄く、自分のことで目いっぱい。内なる葛藤の中、この二つの店にどれだけ救われていたか。自ら足を踏み入れる、貴重な社会とのつながりであった。

宇和島に居を移して数年後、新宿の紀伊國屋での個展の折。谷川さんが背広にネクタイ姿で現れた。いつにないしゃちこばった様子が、真にありがたかった。

邪宗門の扉も開けた。すると、ご主人と奥さんそろって「アッ！」とほほ笑み、10年の時を経て初めての言葉をかわしたのだった。

（吉田　淳治・画家）

愛媛新聞 :朝刊 2020/08/16 面名:文化 ページ:018

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。